

# 視点

## 見張り塔から メディアの今

専修大教授・山田健太さん



ネットと放送の一体化

もつと始まる通常国会に提出予定の法案の一つに放送法改正案がある。そこでは主として、NHKの業務見直しと、NHKのネット(＝通信)進出を實質的に認める内容になると想定されている。その意味するところは、二〇一九年が「放送なるもの」にとって、大きなターニングポイントになる可能性があるということだ。

もともと放送は、通信の極めて特異な形態だ。したがって、放送と通信を一体化するというのは、それ自体自然な考え方でもある。しかし一方で、現在の地上波放送と呼

ばれているテレビやラジオは、全国津々浦々まで電波が行き届き、しかも無料(受信料徴収はあるが)で、誰でも簡単にいつでもアクセスできる「マスメディア」として、歴然と存在してきた。その圧倒的な視聴者数と一斉同報の送信形態によって、日本社会全体の合意形成などに大きな役割を果たしてきたことは疑いようがない。

しかし、一〇年の法改正で放送定義が変更になり、言葉の上で通信と放送が融合していったわけで、さらに今回の法改正で実態が追いつく状況を生むということになる。さら

# 「放送の変質」課題に

にこうした空気を後押しするのが昨年の動きだ。ちょうど一年前、政府筋から一枚のペーパーが流れた。その内容は、民放を不要とする衝撃的なもので、すぐに民放界から総反発が起こり、結果、政府は火消しに回りこむやむやのうちに闇に葬られることになった。この検討主体は官邸直属の規制緩和を議論する正式な

審議会で、六月の報告書では、経済活性化の観点から市場の開放を謳うにとどまった。放送マーケットを一度解体し、新規業者の参入を積極的に受け入れ、新たな市場を形成するところなるのか。こうした根源的な疑問は棚上げされたまま、フルデジタル化さ

れた社会において、放送とネットが一体化するための環境作りが一段と進んでいる。総務省のもとで開かれている有識者会議では、NHKの本格的なネット進出に「サイン」を出した。NHK自身はそのタイミングを見計らっていたかのよう、かねての政治条件であった受信料の引き下げを発表、ネット常時同時配信

の環境を整備した。NHKは今後、公共放送ではなく「公共メディア」としてすべての通信のなかでの雄たけびをあげていきたいとの決意表明でもある。おそらくその際には、いまは想像機ごと視聴者のボウリングを支払うことによって支えられている受信料制度は、全戸か

らの強制徴収といった形態に変化を余儀なくされるだろう。ある意味では偶然であるが、その受信料について最高裁は、一七年十二月に現行制度の合憲性を初めて認定した。NHK自身も内部に設置した有識者会議で、準備よくこうした受信料徴収の妥当性にお墨付きをもらっていた

### 放送の自由を巡る動き

- 2017.12 最高裁がNHK受信料制度に合憲判断
- 18.1 NHK内部に設置された受信料制度等検討委員会が、「常時同時配信の負担のあり方について」など3つの答申を公表
- 18.1 NHKは経営計画で、20年度までの受信料据え置きなどを明記
- 18.2 「通信・放送の改革ロードマップ」と題するペーパーには、放送特有の規制(政治的公平を含む編集番組準則)の撤廃、あまねく受信努力義務の撤廃、「放送(NHKは除く)は基本的に不要」との記載
- 18.5 著作権法改正で「柔

る。

こうしたポスト「放送」において、情報流通の自由は十分に確保できるのか、あるいは権力監視を含めたジャーナリズム機能は保障されるのか、こうした問いが置き去り

にされたまま放送が変質し、相対的に弱体化していくことはないのか。こうした課題を社会としてどう捉え解決していけばよいか問われている。(毎月第2木曜日に掲載)

## 日々論々

作家でマルチタレントのいちごせいごさんが福島県でさまざまな人に会い、話を聞くという本企画。前回に引き続き、東京電力福島第一原発事故の避難から地元に戻った福島県伊達市の母親たちの交流施設「伊達もんもの家」に足を運びました。

原発事故直後、原発から十キロ離れた伊達市は、避難指示が出なかったものの、放射線量が高い地域があった。健康への影響を恐れて県外に避難した母子は、若い母親と乳幼児を中心に九百人に上った。八年近くが経過して七百

# ます



当時の様子  
伊達市で

が集まって話し合った。「途中で転校になるのは良くないでしょ」「家族が離れていいのは二年までだった」。親類らが勧めたのは、つまりは帰郷だ。だが、放射能への不安は強かった。最後は、かはい続け

てくれた夫に申し訳ない気持ちで伊達に戻った。今、一人の娘は元気に伊達市内の学校に通う。それでも「いじめられないか」「勉強が遅れていないか」と気にかかる。「避難するといふ私の選択が、失敗だったとは思

たくない自分があるんです」「そのとき何を感じたの?」「旦那さんは、どう受け止めたんですか。前のめりになって問い掛けていた、いとこさん。「切ないなあ」とため息をついた。菅野多佳子さん(むす)は長男が二歳になるまで、新潟市で過ごした。今も子供を巡る環境への不安は消えないが、避難を経験して、良いこともあったという。

「新潟のママ友の家には年に二、三回は子連れでお泊まりに行く。苦しかったあの頃

料)のみで観覧できる。午前8時半～午後4時半。問い合わせは管理事務所＝電0247(78)2125＝へ。

JR浪江駅前にカフェ開店  
一般社団法人まちづくりなみえが、福島県浪江町のJR浪江駅前に整備を進めていたカフェ「もんべん」が開店した。

軽食は日替わりランチ、ナポリタンの2種類で500円。コーヒーは300円で深い、浅いりのホット2種類とアイスを用意。デザートは各種ケーキやコーヒーマシーンがあり、いずれも300円。価格はいずれも税別。水曜日定休。営業は午前11時～午後4時。問い合わせはまちづくりなみえ＝電0240(23)7530＝へ。

**日本橋しま館**  
M I D E T T E  
営業時間 平日・午前10時30分～午後8時  
土日祝日・午前11時～午後6時  
(年末年始は休館)  
☎03-6262-3977

※福島県産品や催し物の案内を、原則毎月第2木曜日に掲載します。

シヨンぶくま洞画「地底を～」が月28日まで



ード(Lルカやサ雄大な海

連携協定山市の専学園F S生が企画ネーショ00円、中、幼児無